

樹俊頭兵

2006年10月10日受理

韻律の宝庫ともいわれる『ファウスト』全1万2千行のうち、トリメーターと呼ばれる韻律で書かれている箇所は第2部に限られ、その第2幕で35行、第3幕で482行、第4幕で28行、あわせて545行である¹⁾。18世紀の後半から19世紀にかけてドイツの劇の韻律はblankフェルスが主流であった。トリメーターはギリシア悲劇の台詞の部分の韻律を模したものであり、基本的には1行の音節がblankフェルスよりも少し多いだけともいえるが、ドイツで劇の韻律として根づくことはなかった。『ファウスト』第2部第3幕前半部の原型である「ヘレナ」断片(1800)も、200行近いトリメーターがかなりの部分を占める。シラーは『オルレアン乙女』(1801)の第2幕第6—8場、『メッシーナの花嫁』(1803)の第4幕第8場をこの韻律で書いている。本稿では、トリメーターの基本的構造を概観し、特に『ファウスト』第2部第3幕の冒頭を中心にツェズールと呼ばれる行中の句切について考察し、シラーとの比較も試みながら『ファウスト』のトリメーターの特徴を探ってみたい。

『ファウスト』のトリメターの分布(黒塗り部分) [目]はtrochäische Tetrameter; コはコロス
○内はその行数

第1部 第2部 第3幕 第4幕 第5幕

城の中庭 アルカディヤ(岩壁と森)

スパルタのメネラオス王の宮殿の前

スパルタのメネラオス王の宮殿の前

「ハレナ」所片

2 ドイツのトリメターとギリシア悲劇のトリメトロス

ドイツ語でトリメターというのはいわば略称で、詳しくはヤンプスの3メトロン (jambischer Trimeter) とされるが、6詩脚のヤンプス (sechsfüßiger Jambus) と呼ばれる。詩脚ヤンプスは1弱音節と1強音節の組み合わせであり、本稿ではv-で示す。トリメターの詩行はこれが6回繰り返され、v-v-v-v-v-v-となる。この詩行の最後の音節は、弱音節であっても韻律上強音節として扱われるのが慣例である。また行中で弱音節が二つ続く連続弱音節になることもある。この場合、次に来る強音節もひとくくりにして詩脚として捉え、アナペーストvv-という言い方もされる。なおトリメターをこのように図式化するだけでは、同じくドイツの劇の韻律として用いられたアレクサンドランやブランクフェルスとあまり変わらないように見えるが、実際には句またがり(アンジャンプマン)の頻度や行中の句切(ツェズール)の有無も関わってきて、違いはもっと大きいと感じられる。

ドイツのトリメターが模倣したもののギリシアのトリメトロスもいわば略称で、詳しくはイアンボス・トリメトロス (iambos trimetros) と呼ばれる。ドイツの韻律は強音節と弱音節の違いに基づくのに対し、ギリシアの場合は長音節と短音節の違いを基にする。詩脚イアンボスは1短音節と1長音節の組み合わせであり、v-で示す。この詩脚が二つでペアになってメトロンというより大きな単位になる。トリメトロスの場合はメトロンの最初の音節は長短を問わない音節(アンケプス)になる。このメトロンは、アンケプスをxで表すとx-v-となる。トリメトロスの詩行はこれが3度繰り返されたものでありx-v-x-v-x-v-となる²。なお、この詩行の最後の音節は短音節であっても、韻律上長音節として扱われるのが慣例である。ドイツのトリメターの基本的構造は、ギリシアの音節の長短を強弱とし、さらにアンケプスをすべて弱音節として取り入れたとすることができる³。6詩脚であるのにトリメターというのはここに由来する。ただし、もはや3つの構成単位からなるとは意識されず、ヤンプス6詩脚と呼ぶほうが正確だと思われるが、後に述べる句切の特徴は受け継いでおり、由緒のある名称ということであろうか。

3 連続弱音節

純粋なヤンプスだけの行はたとえば

v - v - v - v - v - v -

Bewundert viel und viel gescholten, Helena, 8488

いろいろとたたえられ、またいろいろと悪口をいわれた。⁴

トリメターの場合、先に述べたように行末の音節は強音節として扱われる。行末以外で弱音節が続く場合、これを連続弱音節(Doppelsenkungないしzweisilbige Senkung)と呼び、便宜上テキスト中でも連続弱音節をẽのようにして明示することにする⁵。

v - v - v - v v - v - v -

Noch immer trunken von des Gewoges regsamem 8490 f.

Geschaukel,

まだ波に揺られているような気がする。

連続弱音節は全トリメター545行の中で120箇所余りあり⁶、4、5行に1度の頻度である。これに対して、「ヘレナ」断片では、合唱隊の歌の部分を除く約200行のトリメター中で10箇所余り、ほぼ20行に1度の頻度でしかなかった⁷。見方によれば初めは純粋なヤンプスに近かったのである。ただし、接続詞や前置詞などの本来は弱い1音節語や、動詞や形容詞の語尾を強音節としたり、弱音節を母音省略したりでヤンプスを維持している感はある⁸。

語尾のアクセントの扱いが強音節から弱音節にかわった例。

v - v - v - v - v - v -

Der Rückkehr, mit den tapfersten der Krieger sich. 「ヘレナ」断片

v - v - v - v v - v - v -

Der Rückkehr samt den tapferstẽn seiner Krieger sich. 8495

(メネラオス王が) 勇者たちと帰国を(祝っている)

母音省略をやめて、本来の語形に戻したために連続弱音節にかわった例。

v - v - v - v - v - v -

Zu Cypris Tempel wandelnd, heiliger Pflicht gemäß, 「ヘレナ」断片

v - v - v v - v - v v - v -

Cytherens Tempel besuchend, heiliger Pflicht gemäß, 8511

キュテラ島の神殿を訪れ、聖務を果たすためだった。

すべてがこうした理由によるのではないが、「ヘレナ」断片から『ファウスト』の最終稿に至る過程で、行中で無理が感じられる強音節がかなり除かれ、連続弱音節が著しく増えたことが指摘されている⁹。これによってリズムは

どう変わるのか。またゲーテの意図はどのようなものであったのか。Boghardtは、これに関する様々な見解を引用し、全般的に強音節がいわば増強されると同時に連続弱音節が増えたことで力動性が生じたと結論している¹⁰。またMayは、統一されたなかでの多様性、定めのないなかでの自由、慎ましい単調さのなかでの生命力といった表現をしている¹¹。軽やかさと同時に力強さが求められている、そんな感じか。

ところで、上に引用した8511行には、連続弱音節が行中に2度現れている。こうした行は全トリメーター中で6行に過ぎない¹²。これを稀であるといっているのか、それとも、545行中に125箇所という頻度からすれば、確率的にはこのくらいになるのか。ヤンブスとしての基本的性格が曖昧になるなどの理由で避けられているとか、それとは逆に何らかの表現効果が期待されているとか考えられるが、上の例も含めて6行とも、私には特にどうこう感じられない。これとは別に、連続弱音節が行中に3度現れる行が1箇所だけある。8531行であるが、ここは偶然ではなく、意図的にそうされたと考えられるが、説明の都合上、句切についての考察をして、その後で少し詳しく検討してみたい。

4 行中の句切

1) 句切の意味

行が長い詩形の場合、行の中に句切が認められることがしばしばある。ドイツ語の用語としてツェズール(Zäsur)というが、これは古典のカエスーラ(caesura)という用語にさかのぼる。単に切れ(Schnitt)という言葉も用いられる。これが具体的に何を意味するかについては論者によって必ずしも一致していないように思われる。『ファウスト』第2部の統計的な韻律分析を行っているBressemは箇所を限定せず、もっぱら句読点を指標としてこれにさらに加える形でツェズールを考えている¹³。Kayserのトリメーターの説明には間違いがあることが指摘されている¹⁴。ゲーテの時代の劇のトリメーターをテーマにするBoghardtは、ツェズールを行中での意味の切れ目として、箇所を限定せず、また行中に複数のツェズールを認めている¹⁵。『ファウスト』全体の韻律を論じているCiupkeは、ツェズールの解説でアレクサンドランやテトラメーターをあげてはいるが、トリメーターには言及していない¹⁶。ハンプルク版の『ファウスト』でTrunzは、アレクサンドランに続いてトリメーターを説明して、ツェズールはないと言っている¹⁷。

Wilpertの文芸学用語辞典はZäsurを以下のように説明する。古典の韻律論では、行中の特定の箇所に位置する単語の終わり(切れ目)で、しばしば意味の切れ目と一致する。ドイツの韻律論では、リズムの切れ目というよりはむしろ意味の切れ目であり、単語の終わり(切れ目)または意味の切れ目によって、行を二つないしそれ以上に分割する。トリメーターの主要なツェズールは5音節後の切れ目(penthemimeres)であり、これに次いで7音節後の切れ目(hephthemimeres)がある¹⁸。

言葉の定義の問題であろう。リズムの切れ目と意味の切れ目のどちらを優先させるか。行中に1箇所の切れ目しか認めないか、複数認めるか。その箇所を限定するかしらないか。頻度も問題となろう。ほぼ確実に生じる場合や、おおよその傾向が認められる場合や、少ない頻度も考慮する場合など。あまりに微視的に考えると收拾がつかない恐れがでてくる。単語の切れ目を特定するのは比較的簡単であるが、文法上の切れ目をどのレベルで考えるかは見解の相違が生じる。

Denn seit ich diese Schwelle sorgenlos verließ, 8510

あときは何の気づかいもなくここを出た。¹⁹

Bressemはこの行にツェズールを認めないが、BoghardtはSchwelleの後がツェズールだとしている。²⁰

aber nichts 8579 f.

Lebendigen Atems zeichnet mir der Ordnende,

生き物のことは何も聞かなかった。

Bressemはこの行にもツェズールを認めていないが、BoghardtはAtemsの後とmirの後の二箇所をツェズールだとする²¹。両者とも意味(文意)の切れ目を問題にしてはいるが、切れ目をどのレベルにするかについて考え方が違っているのである。Bressemは、ほぼ句読点に準じた比較的大きな意味のまとまりを考え、Boghardtは句読点がなくとも行中に複数の切れ目を認めるほど比較的小さい意味のまとまりを考えている。こうした考え方の相違もさることながら、たとえばBressemの考え方に拠るにしても、文意の切れ目を優先させる基準とした場合に『ファウスト』のトリメーターは、切れ方の分布に明確な傾向を認めがたい。Bressemによる「ツェズール」の統計を簡単にして引用すれば、『ファウスト』の全トリメーター中には450箇所のツェズールがあるが、その行中の位置の分布は次のようである²²。

行中の位置 第1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11音節後

回数 11 18 36 69 117 10 118 24 40 3 4

第5音節後と第7音節後は他の箇所に比べるとかなり多いが、それでも各々全体の4分の1を占める程度であっ

て、全体を支配する統一的な傾向とまではいえないだろう。

むしろ注目すべきは語の切れである。Bressem自身はこれを語の終わり (Wortschluß) と呼び、先のツェズールほど重要視はしていない。語の終わりとは、語の切れ、語と語の境目のことである。再びBressemの統計を簡単に引用すると、『ファウスト』の全トリメーター中、第5音節後に語の終わりがあるのは442行、第7音節後にあるのは435行で、各々8割ほどの割合である。これだけ見れば、ドイツ語の単語の標準的な音節数を考慮しても、特に驚くほどの割合ではない。ところが、5音節後にも7音節後にも語の終わりが無い行は、Bressemはこれを特に強調してはいないが、全トリメーター中わずか6行である²³。これは偶然とは考えにくく、ゲーテの意図が働いているとしか思えないが、その理由を考える前に語の終わりがなぜそう問題なのかを問題にしたい。まずツェズールの本来の用法をふり返しておく。以下は、主にギリシア悲劇のトリメーターのツェズールに関するSickingの記述の要約である。

トリメーターのように12音節を数える比較的長い詩行は、知覚的にはこれを一つのまとまりとしては捉えがたく、「見渡せる範囲として」5-7音節がひとまとまりとして知覚される。ツェズールは語の切れ目で行をリズム上のコロンの分ける。ある詩のなかのすべての(または大半の)詩行がある同じ1箇所まで単語が切れる場合もあれば(ペンタメーター)、二つの箇所のどちらかで単語が切れる場合もある(トリメーター)。ツェズールによって分けられた部分が、意味の構造と一致する場合、すなわち文法上の大きな切れ目と一致する場合が理想的であるが、そうでない場合もある。ツェズールの箇所における意味の切れ方の程度は大小さまざまである。しかしこれには、同一の詩行が延々と続く場合に陥りがちな単調さの印象を阻む効果がある。 Das verschiedene Gewicht der Sinneseinschnitte an der Zäsurstelle trägt dazu bei, dem Eindruck einer bei einer großen Anzahl von gleichgestalteten Versen immer drohenden Eintönigkeit vorzubeugen. (...) トリメーターの場合、最初から5音節目か7音節目の後にそれがある。両方にある場合は(悲劇作家の場合24-27%) どちらか1箇所をツェズールとし、どちらにするかは文法に照らして判断する。総じて5音節後の切れのほうが7音節後の切れよりも多い。特にエウリピデスの場合がそうで、5音節後の切れが70%になる²⁴。

『ファウスト』のトリメーターの場合、文意の切れを優先すると、どのレベルで区切るにしても、実にさまざまなパターンが生じて、これをある程度の統一性をもって把握するのは困難である。一方、先に述べたように『ファウスト』中で、5音節後にも7音節後にも語の終わりが無い行は1%あるかないかである²⁵。ゲーテは5音節後か7音節後には少なくとも単語レベルの切れがくることを意識していたはずである。Sickingの記述を念頭に置きながら、この切れ(以下簡単に5音切れ・7音切れと呼ぶ)が、意味の切れ(文意・文法・構文の切れ)とどう関わっているのかを見ていく。なお5音節後にも7音節後にも語の終わりがある場合は、文法上の切れの大きさに判断して5音切れか7音切れとする。

2) 語の切れと文意の切れの相関

詩脚やメロンが語の意味を考慮しない純粋にリズム上の比較的小さい単位とするならば、5音切れ7音切れは、単語レベルの意味は考慮するより大きいリズム上の単位とすることができるだろう。以下、これがいろいろなレベルの文意の切れと、どのような相関関係にあるかを具体的に検討していく。できるだけ視覚的に把握しやすいように、5音切れ・7音切れを詩句中には縦線で示す。右欄にはこれを数字で示すほかに、文意の切れもある程度示すよう試みた。詳細については末尾のテキストの説明を参照。

a) 句読点のある意味の切れ目と5音切れ(8513 f.)・7音切れ(8560 f.)が一致する場合、リズムは把握しやすい。

Ist viel geschehen, was die Menschen weit und breit	8513 f.	⑤ 7
So gern erzählen, aber der nicht gerne hört,		⑤ 7
それからいろいろなことがあった。あることないこと、いいふらした人もいる。耳を覆いたくなるようなことばかりだ。		
Eröffnet mir sie wieder, daß ich ein Eilgebot	8560 f.	5 ⑦ *
Des Königs treu erfülle, wie der Gattin ziemt.		⑦

(おまえは大手をひろげて迎え入れた。) このたびもそうしておくれ。王の言葉を王妃が果たす。

b) 句読点はないが前置詞句や2格などの比較的明瞭な意味の切れ目と5音切れ(8528 ff.)・7音切れ(8500)が一致するもの。

Komm' ich als Gattin? komm' ich eine Königin?	8527 ff.	⑤ 7
Komm' ich ein Opfer für des Fürsten bittern Schmerz		⑤ 7
Und für der Griechen lang' erduldetes Mißgeschick?		⑤ *

妻としてもどってきたのか。王妃としてなのか。王の心痛を慰めるためなのか。ギリシアの民が耐えてきた悲運をつぐなうためか。

Mit Kastor auch und | Pollux | fröhlich spielend wuchs, 8500 5 7
カストル、ポルックスの兄弟と戯れながら大きくなった。

c) 意味の切れ目との一致が微妙な場合もある (8494)、明らかに一致しないこともある (8499)。

Dort unten freuet | nun der | König Menelas 8494 f. ⑤ 7
Der Rückkehr samt den | tapfersten | seiner Krieger sich. 5 7
あちらの下手では夫のメネラオス王が勇者たちと帰国を祝っている。

Und, als ich hier mit | Klytämnestren schwesterlich, 8499 ⑤
ここで妹クリュタイメストラや

8494行の語の終わりは5音節後にも7音節後にもあるが、意味の切れ目は5音節後のほうが大きい。ただし文意の切れ目は6音節後のほうがさらに大きいので、この場合どのレベルで一致すると見るかは微妙である。8495行も語の終わりは5音節後にも7音節後にもあるが、前者は定冠詞の後であり、後者は2格とその被修飾語の間であり、切れ目は後者のほうが大きいと考えられるので7音切れとする。8499行目は5音切れではあるが、前置詞句の中であり、意味の切れ目と一致しているとは考えられない。

d) 語の終わりは5音節後にも7音節後にもあるが、意味の切れ方の大小を判断しがたい場合。

Und nun von ihm zu | seiner | Stadt vorausgesandt ; 8525 5 7
先に都に入れといわれた。

このように文意の切れはさまざまなレベルが考えられ、微細に見ていけば視点の違いによって判断も異なりそうである。句読点は、絶対的とははいえないが、大きな目安になる。分詞句、不定詞句も大きな区切りとする。前置詞句も。付加語の2格は、その被修飾語と行末で分かれば句またがりとなろうが、行中の区切りの位置ではどうか。大まかな特徴はこの程度の分類でも捉えられると思うので、意味の区切りについてはこれ以上立ち入らない。BressemとBoghardtの考えが分かれた前に述べた箇所。8510行はBoghardtに同意、8580行はどちらとも違ってしま

Denn seit ich diese | Schwelle | sorgenlos verließ, 8510 5 7
Lebendigen Atems | zeichnet | mir der Ordnende, 8580 ⑤ 7

3) シラーとの比較および「ヘレナ」断片

『ファウスト』3幕の冒頭をまとめて見る。

Bewundert viel und | viel gescholten, Helena, 8488 ff. ⑤
Vom Strande komm' ich, | wo wir | erst gelandet sind, ⑤ 7
Noch immer trunken | von des Gewoges regsamem ⑤ *
Geschaukel, das vom | phrygischen | Blachgefild uns her 5 7 *
Auf sträubig-hohem | Rücken, | durch Poseidons Gunst 5 7
Und Euros' Kraft, in | vaterländische Buchten trug. ⑤ *

いろいろとたたえられ、またいろいろと悪口をいわれた。さきほど上陸して、海岸からすぐここに来た。まだ波に揺られているような気がする。トロヤの浜を登ってからというもの、海が荒れていた。海神ポセイドンの恵みと、風の神エウロスの助けで、故里の入江に入ることができた。

比較のために、シラー『オルレアンの乙女』第2幕第6場冒頭を見る。

Wo soll ich hinfliehn? | Feinde | rings umher und Tod! ⑤ 7
Hier der ergrimmt | Feldherr, | der mit drohndem Schwert 5 7
Die Flucht versperrt | uns dem | Tod entgegen treibt. ⑤ 7
Dort die Fürchterliche, | die verderblich um sich her ⑤ *
Wie die Brunst des Feuers | raset — | Und ringsum kein Busch, 5 7 *
Der mich verbärge, | keiner | Höhle sicherer Raum! ⑤ 7

どっちへ逃げたものか。周りは敵だ。/こっちは唖りたった大將が、刀で威かしながら/逃げ道に立ち塞がって、われらを死の方に追いやっている。/向うでは恐ろしい小娘が、凄まじい焰のように/四角八面に荒れ廻っている。——あたりには/身を匿す藪もない。危険を避ける洞穴もない。(佐藤通次訳)

1800年9月にシラーはゲーテが「ヘレナ」断片を朗読するのを聞きいて「静かで力強い」²⁶と感じ、これに触発され、Hermannの韻律ハンドブックを参考にして『オルレアンの乙女』のトリメーターが書かれたという²⁷。シラーの場合、連続弱音節は 今ここに引用した箇所にはたまたま2箇所あるが 全体としてはかなり稀である。また、文意の比較的大きな切れ目が5音切れか7音切れのどちらかとすべて一致している。これに対し、ゲーテの場合は

「ヘレナ」断片からその四半世紀後の『ファウスト』最終稿になる過程で、文意の句切の自由さは変わらないまま、連続弱音節は飛躍的に増えている。シラーに比べると「ゲーテは句切をずいぶん変えている」²⁸というのは確かに事実であろう。これを肯定的にとれば、ゲーテは自由奔放で、シラーは几帳面、—Sickingの解釈を単純に当てはめると—「単調な印象」を与えかねないことになる。ただし、シラーの行中の句切の規則正しさには、行と行を結びつける句またがりや反作用のような働きをしていないか。ツェズールだけを取り上げるのは片手落ちで、常にアンジャンプマンも睨み合わせて論じるべきかもしれない。

4) 稀な句切

先に掲げたBressemによるツェズールの分布表にもあるように、行の中央に大きな意味の切れ目があるのは10行しかない²⁹。

Doch das Entsetzen, das dem Schoß der alten Nacht, 8649

しかし、太古の闇の膝から生まれたような奇怪なものを見た。

Entlassnem Gaste gleich, entfernend scheiden mag. 8656

あわてて逃げてきた。

しかし1行(8783)を除いて、9行がこのように5音切れまたは7音切れとなっている。なかには8649行のように中央での切れよりも5音での切れのほうが大きい場合も含まれて、それほど大きな落差は感じられないのではな
いかと思われる³⁰。

むしろ5音切れも7音切れもない行のほうが注目される。Bressemの言葉を用いれば、通常は語の終わりが来る箇所にそれがない(ohne einen der üblichen Wortschlüsse)行は6行しかない。7019, 8505, 8531, 8685, 8783, 9076行である。このうち2行(8531, 9076)は、第5音節、正確に言うと通常弱音節になる行頭から5音節目が連続弱音節になっている。

v - v - v v - v - v -

In tiefem Busen geheimnisvoll verbergen mag, 9076

胸深くに秘めている

ただし少し視点をずらして、Busenの後で5音節後に切れ、後半部の始めに弱音節が加わったとみなせば、5音切れの変種扱いでよいと思われる。同様のもう1行(8531)については、他の問題もあるので次の節で扱う。

残る4行のうち3行(7019, 8505, 8783)にはゲーテの表現上の意図が感じられるように思う。その感じを述べてみても所詮ドイツ語を母国語としない者の感想でしかない。数行にとどめる。

v - v - v - v v - v - v -

Wie sich Gewalt Gewaltigērem entgegenstellt, 7019

力と力がぶつかる

カエサルとポンペイウスが雌雄を決したファルサロスの平原。力がより強大なものに立ち向かい自由の...と続き、フランス革命、ナポレオン戦争、ギリシアの独立戦争も想起されたか。力の衝突が、同じ音の反復で描写され、のしかかるようなGewaltigeremが流れを妨げる感じか。

v - v - v - v - v - v -

In Bräutigams-Gestalt entgegen leuchtete. 8505

メネラオスが花婿ときまり、華やかな客としてやってきたときも

メネラオスによって供儀の生贄にされるのではないかという恐れ、家郷に足を踏み入れるや追憶のかなたから蘇る凛々しいその花婿の姿。恐怖のなかで過去への回想を締めくくる句。

v - v - v - v - v - v -

Erobert', marktverkauft', vertauschte Ware du! 8783

しょせんは、さらわれたあと、売り買いされるのがおちというもの。

不気味な姿のボルキュアスが、ヘレナに付き従うトロイアの女たちに向かって執拗に悪口を並べたてるが、その極みの句。

残りの1行は

v - v - v - v - v - v -

Den Stufen zu, worauf empor der Thalamos 8685

わたしは階段に向かった。上はきらびやかな休みどころで、

これだけ取り出せば、どこにでもありそうな何の変哲もない詩句である。行頭から6音節の後に語の切れがあり、たとえばその前後に二音節以上の語があれば当然5音切れにも7音切れにもならない。もっと多くあってもよきそ

うなこのような5音切れでも7音切れでもない行が、『ファウスト』のトリメーターの中で1%あるかないかでしかない。ゲーテは5音切れ・7音切れをはっきり意識していたであろう。トリメーター1行あたりの単語数と単語の音節数の分布などを調べれば、意図が働いていない場合の確率を計算することができるかもしれない。

5 特異な連続弱音節 —8531行—

連続弱音節の頻度については先に述べたが、行中に3度現れる場合が1行だけある³¹。

V - V - V V - V V - V V - V -
Denn Ruf und Schicksäl bestim̄tēn fürwahr die Ünsterblichen 8531 ff.
Zweideutig mir, der Schöngestalt bedenkliche
Begleiter, die an dieser Schwelle mir sogar
Mit düster drohēndē Gegenwart zur Seite stehn.

神は名声と悲運を定めた。美のあやしげな道づれだ。いまでも両側から恐い目つきでにらんでいるような気がする。

ところがこの8531行は「ヘレナ」断片では純粋なヤンブスだったのである。

V - V - V - V - V - V -
Denn Ruf und Schicksal gaben die Ünsterblichen 「ヘレナ」断片

この8531行に関してBressemは、「古代ギリシアの韻律を模倣しようとする詩句が、ところどころで、もとの韻律がもつ特性を超えて、独自のリズムにより特異な表現力を持つことがある」と述べ、この行に句またがりによって続く数行も含めて、この息の長い一文にヘレネの嘆きを読み取ってはいる (S.36)。また同様にBoghardtは連続弱音節 (あるいはアナペースト) を念頭において、「トリメーターの言葉のリズムは重いが、この重さに対抗する作用は何であれヤンブスの言葉の流れを活性化するばかりか、しばしばその流れに直接取って代わる」と言う (S.199)。「ヘレナ」断片と比較しても、『ファウスト』における連続弱音節の頻度からしても、ここにはゲーテの何らかの意図が込められていると推測はできる。BressemもBoghardtも言うように言葉のリズムだけの問題であろうか。

トリメーターであることを前提としなければ、この行の最後は弱音節であろう³²。

V - V - V V - V V - V V - V V
Denn Ruf und Schicksal bestimmten fürwahr die Ünsterblichen

Schicksal以下の部分をみれば、これは叙事詩のヘクサメーターの詩行のダクテュロスだけでなるパターン —詩脚の切れ目と語の切れ目の一致をたくみに避けてさえいる— として通用する。あるいは、少し見方を変えて、この行のSchicksalまでは先にも述べたように5で切れる典型的なトリメーターの前半行とする。後半部分の最後の音節をやはり弱音節とみなして、bestim̄tēnの部分から切り取ってみればv-vv-vv-vvである。これはヘクサメーターの後半部の典型的なパターンである (v) v-vv-vv-xとよく似ている。ゲーテはホメロスの詩句を連想させたかったのではなかったか。『イリアス』第3巻164-165行、メネラオスとパリスの一騎打ちの場面で、プリアモスはヘレネを氣遣ってこう言う。「格別あなたに責任があるわけではない。神々にこそこの責任はあるというもの、神様がたが私に対して、アカイア人との涙にみちた戦いを仕掛けられたのだ」(呉茂一訳)。トロイア戦争の「責任は神々にこそある」という164行の後半部

V - V V - V V - X
theoi ny moi aitioi eisin³³

ヘクサメーターの韻律を模したというハインリッヒ・フォスの訳 (1793年)

V V - V V - V V - V
die Ünsterblichen sind es mir schuldig,

『ファウスト』のヘレナは、トロイア戦争の原因になり毀誉褒貶にさらされる自分の運命を「定めたのはまさに不死なる者たち (神々)」と言う。

V - V V - V V - V V
bestim̄tēn fürwahr die Ünsterblichen

最後の弱音節が余分だが、往時のヘクサメーターは行末の休止を考慮して最後の音節の長短は問わなかったというから、不問に。推測の域を出ないが、『ファウスト』8531行は、イリアスへの連想からリズムが自然にそちらへ流れたか、ゲーテが意図してヘクサメーターをまぎれ込ませたのではなからうか。

6 終わりに

Bressemのようにツェズールを文意の比較的大きな切れ目として考える場合に、最も多い切れ目は5音節後と7音節後でそれぞれ全体の4分の1であり、交替するツェズールとみて合計すると全体のほぼ半数である。Boghardtのように、さらに小さい単位での意味の切れを考えるとするなら、さらに複雑になる。ただ単に文意の切れ目としてのツェズールだけでは、シラーの場合とはかく、『ファウスト』のトリメターの詩行としての統一性は把握しがたい。これに対して、語レベルでの5音切れか7音切れは、ほぼ忠実に守られているといってよい。本論では述べなかったが、トリメターの5音切れも7音切れもklingendとかweiblichと形容される柔らかく余韻のある行中の切れであり、これは基本的にstumpfとかmännlichと形容されるトリメターの行末とコントラストをなしているという。ゲーテはこのような「5音」「7音」の交替をいわばバックグラウンドのリズムとし、文意の切れを時にはこれに重ね合わせ、時にはこれとはずらして、単調になるのを避けつつ統一性を図ったのではなかったろうか。ギリシア悲劇のトリメターに関するSickingの見方が正しいなら、意味とリズムの一致とずれをゲーテは伝統としてむしろ忠実に守ったのだといえる。

1823年10月21日のエッカーマンとの対話で、ドイツ悲劇の詩形に関して、トリメターの詩行はドイツ人にとっては長すぎると述べている。1800年の「ヘレナ」断片から四半世紀を経て『ファウスト』第3幕に着手したのはこれより少し後の1925-26年である。トリメターは長すぎると感じながらゲーテは書いたのだろうか。そうでないとしたら、それは句切れの自由さに加わった連続弱音節という革新のせいであったかもしれない。

テキスト1 『ファウスト』第2部第3幕のトリメター最初の28行 (Hamburger Ausgabe)

テキストの中で、「|」は行頭から数えて5音節または7音節の後にくる単語の切れ目を示す。また右欄には⑤または⑦の丸付き数字で表示する。5音節の後にも7音節の後にも単語の切れ目がある場合は、文法上の(意味上の)切れ方が大きいほうを「|」で示し、小さいほうを「!」で示す。この場合右欄には、切れ方が大きいほうの数字を丸付きにし、小さいほうは数字のみの表示にする。また、文法上の(意味上の)切れ方の大小を判断しがたい場合は、両方とも「!」で示す。この場合右欄には、5 7と表示する。

また、行中での文法上(意味上)の比較的大きい切れ目と⑤または⑦が一致するときは、⑤または⑦との白抜き表示する。文法上(意味上)の比較的大きい切れ目とは、句読点がある場合のほか、主文・副文、分詞句、不定詞句、前置詞句、(2格)などをまとまりとしてその前後の切れ目とし、微妙な場合は極力含めず注記する。連続弱音節はテキスト中でdes Gēwogesのように示す。ただしそれが二重母音を含む場合はseid のよう最初の母音のみマークする。右欄の*は連続弱音節があることを示し、**はそれが2箇所あることを示す(Bressem, S.134 fに拠る)。

Bewundert viel und viel gescholten, Helena,		⑤	
Vom Strande komm' ich, wo wir erst gelandet sind,		⑤ 7	
Noch immer trunken von des Gēwoges regsamem	8490	⑤	*
Geschaukel, das vom phrygischē Blachgefeld uns her		5 7	*
Auf sträubig-hohem Rücken, durch Poseidons Gunst		5 ⑦	
Und Euros' Kraft, in vaterländischē Buchten trug.		⑤	*
Dort unten freuet nun der König Menelas		⑤ 7	
Der Rückkehr samt den tapferstē seiner Krieger sich.	8495	5 ⑦	*
Du aber heiße mich willkommen, hohes Haus,		⑤	
Das Tyndārēos, mein Vater, nah dem Hange sich		5 ⑦	*
Von Pallas' Hügel wiederkehrend aufgebaut		⑤	
Und, als ich hier mit Klytāmnestren schwesterlich,		⑤	
Mit Kastor auch und Pollux fröhlich spielend wuchs,	8500	5 ⑦	
Vor allen Häusern Spartas herrlich ausgeschmückt.		5 ⑦	
Gegrüßet seid mir, der ehrnen Pforte Flügel ihr!		5 7	*
Durch euer gastlich ladendēs Weit-Eröffnen einst		5 7	*
Geschah's, daß mir, erwählt aus vielen, Menelas		⑦	
In Bräutigamsgestalt entgegenleuchtete.	8505	# 6	注1)
Eröffnet mir sie wieder, daß ich ein Eilgebot		5 ⑦	*
Des Königs treu erfülle, wie der Gattin ziemt.		⑦	

Laßt mich hinein! und alles bleibe hinter mir,	8510	5 7	
Was mich umstürmte bis hieher, verhängnisvoll.		5	
Denn seit ich diese Schwelle sorgenlos verließ,	8510	5 7	
Cytherens Tempel besuchend, heiliger Pflicht gemäß,		(5) 7	* * 注2)
Mich aber dort ein Räuber griff, der phrygische,		5 7	
Ist viel geschehen, was die Menschen weit und breit		5 7	
So gern erzählen, aber der nicht gerne hört,		5 7	
Von dem die Sage wachsend sich zum Märchen spann.	8515	5 7	

注1) 4節の4)「稀な句切」を参照。

注2) 冒頭から5音節目は通常弱音節になるが、これが連続弱音節に。4節の4)「稀な句切」を参照。

テキスト2 シラー『オルレアンの乙女』第2幕・第6場 (Nationalausgabe)

MONTGOMERY *allein*

Wo soll ich hinfliehn? Feinde rings umher und Tod!	5 7	
Hier der ergrimmt Feldherr, der mit drohndem Schwert	5 7	
Die Flucht versperrend uns dem Tod entgegen treibt.	5 7	
Dort die Fürchterliche, die verderblich um sich her	5	*
Wie die Brunst des Feuers raset — Und ringsum kein Busch,	5 7	*
Der mich verbärge, keiner Höhle sichrer Raum!	5 7	
O wär ich nimmer über Meer hieher geschifft,	5 7	
Ich Unglückselger! Eitler Wahn betörte mich,	5 7	
Wohlfeilen Ruhm zu suchen in dem Frankenkrieg,	5 7	
Und jetzo führt mich das verderbliche Geschick	5	
In diese blutige Mordschlacht. — Wär ich weit von hier	5 7	
Daheim noch an der Savern' blühendem Gestad,	5 7	
Im sichern Vaterhause, wo die Mutter mir	7	
In Gram zurückblieb und die zarte süße Braut.	5 7	

Johanna zeigt sich in der Ferne

Weh mir! Was seh ich! Dort erscheint die Schreckliche!	5	
Aus Brandes Flammen, düster leuchtend, hebt sie sich,	5 7	
Wie aus der Hölle Rachen ein Gespenst der Nacht	5 7	
Hervor. — Wohin entrinn ich! Schon ergreift sie mich	7	
Mit ihren Feueraugen, wirft von fern	7	注) この行は10音節。
Der Blicke Schlingen nimmer fehlend nach mir aus.	5 7	
Um meine Füße, fest und fester, wirret sich	5 7	
Das Zauberknäul, daß sie gefesselt mir die Flucht	5 7	
Versagen! Hinsehn muß ich, wie das Herz mir auch	5 7	
Dagegen kämpfe, nach der tödlichen Gestalt!	5 7	

Johanna tut einige Schritte ihm entgegen, und bleibt wieder stehen

Sie naht! Ich will nicht warten, bis die Grimmige	5 7
Zuerst mich anfällt! Bittend will ich ihre Knie	5 7
Umfassen, um mein Leben flehn, sie ist ein Weib,	5 7
Ob ich vielleicht durch Tränen sie erweichen kann!	5 7

Indem er auf sie zugehen will, tritt sie ihm rasch entgegen

注

- 1 M. Ciupke: „Des Geklimpers vielverworrner Töne Rausch“ Die metrische Gestaltung in Goethes „Faust“, Göttingen 1994. S.230 f. なお ['tri:me'tər] ではあるが、本稿ではトリメターと表記する。
- 2 アンケプスはどちらかといえば長音節になることのほうが多い。長音節ないしアンケプスが2短音節になることもある。

- 3 邦語による解説は、逸身喜一郎「ギリシア悲劇の韻律」(『ギリシア悲劇全集』別巻 岩波書店 1992所収)、『アリストテレース「詩学」・ホラーティウス「詩論」』(松本仁助・岡道男訳) 岩波文庫 1997. 116頁以下を参照。
- 4 引用はハンプルク版により、池内紀訳(集英社 2000)を添える。
- 5 連続弱音節の箇所についてはM. Bressemer: Der metrische Aufbau des Faust II und seine innere Notwendigkeit, Berlin 1931に拠る。Bressemerは古典の韻律論に依拠してAuflösung(長音分割)という術語を用いている。ただし古典の韻律論にひきつけ過ぎている点もあり、これへの批判はK. May: Faust 2. Teil. In der Sprachform gedeutet (zuerst 1936), München 1962. S.160やM. Boghardt: Der jambische Trimeter im Drama der Goethezeit, Hamburg 1973. Anmerkungen, S. 100などに見られる。
- 6 Bressemer, S.135; Boghardt, Anmerkungen, S.100 f..
- 7 Boghardt, Anmerkungen, S.100 f.
- 8 Boghardt, S.197 ff.
- 9 Bressemer, S.131; Boghardt, S.197 ffなど。
- 10 Boghardt, S.200; Anmerkungen, S.100 ff.
- 11 May, S.162.
- 12 Bressemer, S.135もBoghardt, Anmerkungen S.101もv. 8511, 8568, 8581, 8812, 8949, 8954を挙げている。
- 13 Bressemer, S.143.
- 14 Boghardt, Anmerkungen S.7がKayser: Kleine deutsche Versschule, S.30 f.を。
- 15 Boghardt, S.195 f.
- 16 Ciupke, S.286; 290.
- 17 ハンプルク版1996(第16版) S.497.
- 18 G. Wilpert: Sachwörterbuch der Literatur, 8. Aufl. 2001. Zäsurの項目。正確に言うとは「5音節後」というよりは、「詩脚の半分(hemimeres)を単位としてその5単位分の後」であり、「第5位(Element, position)の後」という言い方もされる。長音節やアンペプスガ2つの短音節になる場合などにこのような表現が必要である。ドイツ語の場合も、連続弱音節を含む場合などは「音節」という表現は適切でなくなるが、それ以外で特に問題とならない限り本稿では「音節」という表現を用いる。
- 19 池内訳の底本はSchwelleではなくStelle。
- 20 Bressemer, S.144; Boghardt, S.195.
- 21 Bressemer, S.144; Boghardt, S.196.
- 22 Bressemer, S.143.
- 23 Bressemer, S.145 fが挙げているのは v. 7019, 8505, 8531, 8685, 8783, 9076である。
- 24 C.M.J. Sicking: Griechische Verslehre, München 1993. S.52; 95 f. 要約ではcaesura penthemimeresを5音節後の切れ、caesura hephthemimeresを7音節後の切れとした。注18参照。
- 25 Sicking, S.96によれば、ギリシア悲劇におけるそのような行の割合はほぼ2-4%, さらに悲劇よりも少し前のイアンボス詩人や後のヘレニズム期のエピグラムには全くないという。
- 26 ゲーテ宛書簡 1800年9月23日。
- 27 Schillers Werke (Nationalausgabe) Bd.9, S.430.
- 28 N. Gabriel: »Furchtbar und sanft«. Zum Trimeter in Schillers Jungfrau von Orleans (II, 6-8). In: Jahrbuch der deutschen Schillergesellschaft, 29. Jahrgang 1985. S.126.
- 29 Bressemer, S.143 ff.によればv. 7016, 8649, 8656, 8766, 8783, 8786, 8825, 8855, 9029, 10047である。
- 30 この行の中央の切れ目は、関係文中の分詞句の境界である。Bressemerは句読点がない箇所でもこのような分詞句の切れ目はツェズールとしている。
- 31 Bressemer, S. 136.
- 32 Wilamowitz-Moellendorffは同様の先に引用した8490行についてであるが、弱音節に終わるこの行末の響きは、ブランクフェルスの弱音節に終わる行末の響きに著しく近いと述べている(Griechische Verskunst S.12.)。Boghardt, Anmerkungen S.104が指摘。
- 33 ヘクサメトロスでは、語が長母音や二重母音で終わり、その後に母音で始まる語が続く場合、前者は短音節とされる。